

ヒューマノイド
伊坂 幸太郎

伊坂 幸太郎

やくそく
約束を思い出したのは、職場の会議室にいるときだ。
おも
だ
かこ
アーブルをぐるつと囲んでいた。十数人はいる。
かいぎしつ
しきば
かくぶしょ
打ち合わせで、各部署の担当者が

会議中の緊張感は苦手だった。入社して八年がたつけれど、年下の社員のほうがしつかりして見えるし、自分の発言に手応えを感じたこともない。

休憩に入つたところで、隣に座つていた先輩社員が、「失敗したなかつたことを反省しているのだ

「特は問題なが一
恥かいちやつた。」

「人間は、恥ずかしいと思うようになりますから。」

そう口にした自分にはつとする。十数年前、同級生から聞いた言葉だ。

タクシの顔と言葉が浮かぶ
六月十日は会おう いやあ三十歳になつたときには

三十歳の六月十日は、今日は。そう思ったところで進行役の上司が、「それでは会議を再開します。」と立ち上がった。

タクジとは、特別仲がよいというほどでもなかつた。所属する部活動も違い、中学校以外の場所で遊んだ記憶もない。もつと親しい友達は別にいた。ただ、彼と教室でたわいもない話をするのは好きだつた。

一僕がピニーマノイトロホットを作るなら
タクジは、よくそういう言い方かたをした。
そつくりの、もしくは人間以上にんげんいじょうの知能ちのうをもつ

例えれば僕が、「ゲームをやつっていても、すぐ飽きてしまうんだ。」と言うと、タクジは、「僕がヒューマノイドロボットを作るとしたら、『飽きる』機能は付けるよ。」と眞面目な顔で主張した。「人間はあえて、飽きるようになっている。そう思うんだよね。」と。

「できている、ってどういうこと。
飽あきることがなかつたら、ずっと

になるだろ。飽きるからこそ、新しいことをやるから人間は進歩しない。」

20 : : : : : 15 : : : : : 10



登場人物の言動の意味を考え、自分の解釈を語り合おう。

- 解を深める。
過去と現在、伏線との関係を読み解き、登場人物の言動の意味を考える。

2
二
三

10

漢 懷 オク

もしくは 9

人類の進化とは大げさだな、と僕はあきれた。

あ
き
の
う
ぜ
つ
た
い
つ

「だから、僕がヒューマノイドロボットを作るとしたら、『飽きる』機能は絶対に付ける。」
何をばかなことを言っているのだ、と僕は思ったが、自分が勉強に飽きてくると、「これは人間が誰しももつている機能なのかもしれない。」と考えるようにはなった。

そもそもタクジと話すようになつたのも、「人間の機能」の話題がきつかけだつた。「恥ず
くなる一機能」について、さ。

その日、ひ
僕は登校中に恥をかく

らしき姿を見つけ、「アイコ、おはよう。」と声をかけた。相手が振り返り、それがアイコでなく、上級生だとわかったときには、そつとした。向こうはげんそうに眉をひそめていたが、僕は、「間違えました。」とも「すみません。」とも言えなかつた。取り繕うように髪の毛を触り、信号が切り替わるのを待つだけだつた。そこを、タクジに目撃されたのだ。からかわれるにちがいない、と覚悟した。けれど、彼は笑うでもなく、「どうして人間つて恥ずかしくなるのか、前から不思議だつたんだよね。」と真剣な顔で言うものだから、驚いた。

「だつて、恥ずかしい気持ちなんて要らないじゃないか。誰かに迷惑をかけたならまだしも人前で転んだだけでも恥ずかしくなる。恥をかくと、見捨てられたような気持ちになるし、自分の評価が地におちたような気分になる。そんな機能があつて、何の役に立つんだろう。」僕は困惑した。「恥ずかしさ」と「機能」を結び付ける人に初めて会った。

は「どういうこと」

少しすると彼が、「あ、わかつた。」と、うれしそうにこつちを見た。「失敗を繰り返さないためかな。こんな恥ずかしいことはもうごめんだ、と思つて、次には気をつける。そのための機能なのかも。」

「でも、大勢の前で名前を呼ばれただけでも恥ずかしくなるよ。失敗したときだけではなくて、目立つただけで恥をかく。」

「確かに。」タクジも認めた。少し考えた後で、「もし僕がヒューマノイドロボットを作るなら、人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする。」と宣言するように言った。

「人間にとつて、恥をかくか、かかないかというのは重要なことだろ。恥ずかしかった記憶はいつまでたつても、くつきりと覚えている。恥をかいたことで泣く人もいれば、怒る人もいる。そんなこともわかつてくれないロボットなんて信用したくない。」

かいぎ
会議で飛び交う発言をよそに、僕は中学時代のことについてをはせて いる。
じゅぎょうかう
授業中に、恥ずかしい言い間違いをし、同級生たちから笑われたことがあつた。たいした
まわ
まちが
わら
まくじしん

会議で飛び交う発言をよそに、僕は中学時代のことについて思ひをはせている。授業中に恥ずかしい言い間違いをし、同級生たちから笑われたことがあった。たいしたミスではなく、だからこそ周りも気楽に笑つたのだろうが、僕自身はどうしていいのかわからず、顔を引きつらせ、弱々しい笑みを浮かべるだけだった。

すると、すぐにタクジが手を挙げた。そして、別の言い間違いをした。「連鎖反応です。」

と、彼が真面目な面もちで言うと、教室がまたどつと沸いた。

今から思えば僕は、恥をかく場面でも動搖しないタクジに、憧れに近い思いを抱いていた。のかもしれない。失敗や不運に対し、いちいち落ち込む自分とは違うのだ、と。

20 15 10 5

| | | | | |
|---|--------------|-----------------------------|------------------------|-----------------------------|
| 19 漢 憧 | 17 漢 鎖 | 13 訓 飛 び 交 う | 19 動 搖 す る | 18 面 も ち 意 類 |
| あ こ が れ る <small>シヨウ</small> | く さ り | | く う とう | お も ち い |

憧
れ
連鎖反応
(か
う
せ
い
か
ん
ご
う)

20 15 10 5

| | | | | | | | | | | | |
|----|---------------------------|----|--------------|----|-----------------|----|-----------|----|--------------------------|----|---------------------------------------|
| 17 | 音 漢 漢替 かかるわ る | 12 | 漢 眉 まゆ | 10 | 地 地におちる 文 | 19 | 取り繕つ 意 | 11 | 眉 眉ひとつ動かさない 眉根を寄せる | 10 | 眉をひそめる 眉を開く 眉ひとつ動かさない 眉根を寄せる |
|----|---------------------------|----|--------------|----|-----------------|----|-----------|----|--------------------------|----|---------------------------------------|

とができなかつた、と先生が申し訳なさそうに説明するのを、僕は窓の外を眺めながら聞いていた。

会議はいつのまにか終わっている。資料の整理を終えると、窓の外が既に暗い。挨拶をして、職場を後にした。

エレベーターの中で携帯端末を触り、再び日付を確かめる。六月十日はロボットの日、と心の中でつぶやく。

タクジが引つ越した後、僕は連絡を取ろうと思つたものの、行動には移さなかつた。最後のやり取りに後ろめたさがあり、その後ろめたさと向き合ふことを避けていたのだろう。部活動の大会や高校受験のあれやこれやで忙しいのをいいことに、結局、それきりになつた。ただ、時おり、タクジとの最後のやり取りのときの自分の態度を思い出すと、胸の奥に重苦しいものを感じた。

駅のホームで、電車が来るのを待つているときも、僕はタクジのことを考えていた。あの美術の授業で、タクジはわざと転んだわけではなかつた。謝つてもくれた。

プラットホームに設置されたディスプレイ広告が目に入つた。カラフルな絵の具がはじける映像が繰り返されている。頭の中を小突かれたような気分になつた。

自宅とは逆方向に行く列車に乗り込んでいた。

駅を出るとすぐに目的の場所に着いた。昔、駅前広場だった場所は、ドーム型球場を小さくしたような施設となつていて、スポーツの試合やコンサートの会場として使われることが多くなつた。

多くの僕も何度も来たことがあつた。

入り口近くには、「ロボットの日」と表示があり、イベント内容が示されていた。今もタクジが、ロボットに興味があるのならばこれを見に来ているのではないか、と期待が増す。日も落ちたから、終了しているのかと思ひきや、まだ開催中だ。「入場無料」の文言にも後押しされ、僕は吸い込まれるように中に入った。

ドーム内は広々としていて、中央にはステージが置かれていた。そこから外側に向かつて、傾きをつけて観客席がぐるつと囲んでいる。

ステージ上では二人の人間が距離を取り、キヤツチボールをしている。長い距離を緩やかな山を描くように飛び、ボールが行つたり来たりして、ポーン、と放られたものが、ポーン、と戻つてくる。その軌道を眺めているだけで気持ちよくなつたが、高い位置に設置された大型ビジョンの映像を見て、その一方が人間ではなく、ロボットだとわかつた。

ロボットがキヤツチボールの相手をしているのだ。

「ロボットが人の形をしている必要はありませんが、このロボットは子供から高齢者まで、人と触れ合うことを目的としているため、人の形に似ているほうが安心感をもつてもらえると考えました」と開発者らしき人の説明が、スピーカーから聞こえてきた。「A.I機能により、相手に合わせて反応も変えられます。」

そのA.I機能で人探しはできないのかな、と思ひながら僕はタクジの姿を探し、あちこち歩き回つた。観客席にいる人たちの顔を確かめていく。

少しすると、タクジが今日ここに来る可能性はかなり低いことに気がついた。僕もたまたま思い出しただけなのだ。そもそも、中学生の頃のタクジの顔しか知らない。万が一、彼が

20 15 10 5

10 漢 軌
軌
キ
4 漢 催
催
キ
20 万
万
が
一
文
文

軌道
軌道
開催
開催
サ
サ
イ
イ
シ
シ

15 A.I 人工知能。人間の知能を

再現したもの。

20 15 10 5

9 漢 避
避
さ
さ
け
ける
4 漢 拶
拶
サツ
4 漢 挨
挨
アイ
既
す
きて
に

避
避
け
ける
4 漢 挨
拶
サツ
4 漢 挨
拶
サツ
既
す
きて
に



作者 伊坂幸太郎
著書 「重力ピエロ」「アヒルと鴨のコインロッカー」「チルドレン」「死神の精度」
出典 「ゴールデンスランバー」「逆ソクラテス」など。
本書のための書きおろし。



大型ビジョンの映像が切り替わり、ステージ上の開発者が映った。手を振っている。
僕は通路で棒立ちになつたまま、しばらく動けなかつた。
「皆さん、友人が来てくれていました。」と彼は無邪気に言い、そして僕の名前を呼んだ。
約束のことを覚えていたのか、それとも約束とは無関係に、このイベントに参加していただけなのかはわからない。ただ確かに、彼はそこにいた。ロボットの日、三十歳のときに、だ。彼が操作したのか、それともA.I.が判断したのか、ロボットが僕の方を指さし、その後で手を振つた。

「タクジ！」と叫びたかった。ただ、言葉が外に出なかつた。胸に空気が詰まつていてるかのようだ。タクジ、あのときは「めん。それをどうにか伝えないと」とあせる。

観客席にいる人たちが、僕に注目していた。ドーム中の視線が集まるかのようだ。僕の顔は真っ赤になつていたにちがいない。

こちらに手を振るヒューマノイドロボットは、この恥ずかしさをわかつていてるようには、とうてい見えなかつた。

タクジ、聞いていた話と違うじやないか。

広がる読書

3 漢字類
3 無邪気
8 叫
3 漢字の練習
「カザアナ」森絵都
「逆ソクラテス」伊坂幸太郎
「ゴールデンスランバー」「死神の精度」伊坂幸太郎

QRコード

ここに来ていたとしても、わかるわけがなかつた。
一気に疲れて、僕は空いている席を見つけると腰を下ろした。明日の仕事を考えながら、ロボットの滑らかな動きを、ぼんやりと眺める。先ほどまでキヤツチボールをしていたロボットが今度は移動し始めた。予想以上に滑らかに歩行している。

「ロボットに付いたカメラは、遠くの映像も拡大して届けてくれます。」開発者が説明すると、大型ビジョンに、観客席の様子が映し出された。移動するロボットのカメラが捉えたものだろう。

僕は感心したが、最後まで見ていて必要もないと思い、席から立つ。ゆっくりと出口へ向かおうとした。

すると、「あ」と観客席から声が上がつた。何事かと振り返れば、ステージ上の器具にぶつかり、ロボットが転倒したところだつた。

「ああ、そういえば、言い忘れていました。」とマイクを通して聞こえる。「このロボットは転んでも、自分で起き上ります。転ぶことはしかたがありません。大事なのは、起き上がることです。」ふとその言葉に引っ掛けかりを覚えた。ほぼ同時に、「久しぶり！」と大きな声がドーム内に響き渡つた。

ぎよっとし、通路上で動けなくなる。スピーカーから流れる開発者の声だった。

「元気だった？」

